

日野川の歴史

第3回 日野川の渡し

杉本 良巳さん（米子市歴史館運営委員長）

江戸時代に米子から岡山県新庄へ向かう出雲街道の難所は峠越えと川越えであった。わけても日野川越えは賃金が必要なうえ、危険を伴う最大の難所であった。米子から溝口へ行く時と、溝口から二部へ行く時、そして舟場から根雨へ渡る時と、3度の川越えが必要であった。こうした渡りの繰り返しが旅人を悩ませた。

江戸末期に編集された『伯耆志』によると、米子から日野川の渡り場として4つのルートがあった。

- ①八幡村から馬場村（現在の東八幡）へ〈八幡の渡し〉
- ②四日市村（現在の福市）から古川・豊田村（現在の古豊千）へ〈上の渡し〉
- ③車尾村から熊党村へ〈中の渡し〉
- ④上福原村から日吉津村へ〈下の渡し〉

どのルートを選ぶかは旅の目的地にもよるが、その時々水量や川床の状況にもよったと思われ、上方へ向かう旅人が最も多く選んだのは“八幡の渡し”であった。八幡へは米子から勝田村を経て米川土手を上って観音寺村で法勝寺川を歩いて渡る。このあたりの法勝寺川の川幅は約30m、水深約60cmであった。

法勝寺川を渡ると、日野川土手沿いに八幡村まで行くのであるが、ここの渡しは明治以降も渡りの好場所として利用された。ここいらの日野川は川幅が300mからあるが、水の流れは2筋あって、1つは幅約30m、深さ約1m50cm、他の1つは幅約60m、深さ約75cmであった。深い方は舟で渡し、浅い方は歩いて渡った。『伯耆志』は“八幡の渡し”について「渡舟一艘。渡舟は馬場村と相兼て官より米2石4斗（6俵）を給す。常には仮橋を懸けて往来を便せり。河幅は150間と云えり」と記している。

ふだんは仮橋を架けたり、舟で渡したりしている渡り場もいったん洪水ともなると、「両三日渡るべからず」という状態になった。

溝口の渡し場は鬼守橋の上流にあった。溝口の南外れに「字船場」の地名が残っている。ここが溝口の渡し場で、対岸は宇代の「字大守」である。『因伯地理志』（1726）によれば、「川幅約60m、深さ1m35cm、舟で人を渡す。洪水すれば即ち1日ほど渡るべからず」であったという。松江藩主が参勤交代で渡る時は、米子の深浦から舟頭を招いた。

溝口側の渡し場は護岸工事で旧状は失われているが、大守の岸辺は現在竹やぶに覆われてはいるが、取り払えば石段など江戸時代の渡し場の施設が見られるはずである。松江藩の一行は渡り終えると、近くの大守神社で隊列を整えたといわれている。

二部から間地峠を下っていくと舟場に出る。舟場は文字通り日野川の渡し場であった。舟場の渡しは集落の下側にあって舟で渡した。

天保2年（1831）の記録によると、舟場の渡しの御舟手組は「武庫、俣野、下安井、州河崎、舟場、渡、奥渡、根雨、眼角、板井原、金持、貝原、野田、津地の14か村」で構成されていた。

舟場の対岸の根雨の船着場は、現在国道と鉄道を造成した盛り土の下になっている。

以上が出雲街道の渡し場であるが、これはあくまでも街道を旅する人の渡し場であって藩営である。しかし、地域の生活の場としての日野川の渡しを考えればもっと多くの渡し場が必要である。それは藩にとっても同様であって、たとえば黒坂には陣屋があったが、そこに渡しがなければ不便である。それが黒坂村御舟手組で、黒坂、安原、上菅、下榎、榎原、久佳、小河内、中菅、下菅の9か村で構成されていた。

藩営以外には官許を受け、運上銀（営業税）を上納して交通の便をはかる私設の渡舟があった。日野川上流では上菅、野田、洲河崎、久連、庄などが知られており、いずれも渡場と舟を所有していた。ただこれら私設渡舟の維持経営がどのように行われたかは十分明らかでないが、上菅に「船田地」と呼ばれるものがあって、その小作米を渡舟の維持管理に当てたようである。「船田地」は所有者を失った後、村中持として明治に至った。

現在、日野川に架かる鉄筋の橋を渡るたび過去の苦労が偲ばれ感無量である。



舟場の渡し場に建立
「毛槍を振る奴」の像
石田 明 製作



八幡の渡し場 大正年間